

ずいひつ No.119

2016年5月25日発行

梅雨の名脇役 『アジサイ』

花粉のシーズンもやっと終わり、日に日に上がる気温が夏の始まりを告げようとしています。

しかし、夏の前に待っているわずらわしい季節、梅雨の到来が間近に迫っています。蒸し暑く、どんよりとした空模様。傘を片手に、今日も天気予報とにらめっこ。そんな外に出るのも面倒になりがちな梅雨の時期に文字通り花を添えてくれるのが、大輪のアジサイです。6月から7月にかけて開花し、高さ1メートルから2メートル近くになり、大きな毬のような花を咲かせ、青や白にピンク、緑といった色とりどりの姿を見せてくれます。

ここで豆知識。アジサイの特徴の一つともいえる花の色は、株が植えられている土の酸度によって変わります。土の酸度が酸性に傾いているなら青色に、アルカリ性に傾いているならピンク色に変化するとされています。同じ場所に咲いているのに、花の色が微妙に違うのは、株の植えてある土の状態が少しずつ違うからなのです。品種によっては開花から枯れるまで色が変わらないものもありますが、一般的にみられる《開花から日が経つごとに起こる色の变化》から別名『七変化』とも呼ばれ、花言葉も『移り気』と色の移り変わりに関連したものになっています。

さらに豆知識をもう1つ。愛知学院大学楠元キャンパスがある千種区。その『区の花』にアジサイが制定されていることを皆さんはご存知でしょうか？同区にある『茶屋が坂公園』には約5000株ものアジサイが植えられていて、毎年大きな花々が公園に彩りを添えています。

和歌の世界での『アジサイ』

梅雨の時期になると日本中から脚光を浴びるアジサイ。しかし、梅雨を代表する花として定着したのはつい最近のことです。季節の移り変わりや花の美しさなどを詠む和歌の中でも、アジサイを詠んだ歌は極めて少ないといわれています。目立つ大きさや色合いのわりに、昔の日本ではアジサイに対する関心がさほど高くなかったようです。



『あぢさゐの 下葉にすだく螢をば

四ひらの数の係ふかとぞ見る』

上の和歌は百人一首でも有名な歌人、ふじわらのさだいえ 藤原定家（ごんちゅうなごんさだいえ 権中納言定家）の自撰家集『しゅういっくそ 拾遺愚草』からの一首で、数少ないアジサイの登場する和歌です。『日もとつぱりと暮れてアジサイの花も夕闇に沈んでいく。螢が飛び始め、アジサイの下葉に集まりまたたくと、アジサイの花が増えたように見えるものだ』という内容になっています。

この和歌の主役はアジサイではなく、その葉の陰に集まり輝く螢。アジサイは桜や梅と違い、和歌の主題として詠まれるよりも、引き立て役をする花です。色鮮やかで目を引く大輪にもかかわらず、主役の座を他に譲る慎ましやかな名脇役。皆さんも、今年の梅雨は傘を片手にアジサイが彩る景色を見つけにいきませんか？

参照：『名古屋市：千種区の花「アジサイ」について（千種区）』 / 『暮らしとアジサイ1：万葉～鎌倉』
(雨女な新米司書 M)